第７回の感想

ワークを体験して、いろいろな感じ方や考え方に触れることができて、楽しかったです。またワークの体験を通して、この活動をする上での注意点や、手順が少しわかってきたような気がします。難しく考えずに、身近な問題や出来事から、極力ニュートラルに個々の意見を聞き、自分の意見も出して、色々な視点、立場を考慮し対話を重ねていくということであれば、1：1でも、学習感が違っていても可能ですし、より学習者の「話したい」を刺激できると思いました。
実践していきたいと思います。

第6回に引き続き、参加させていただきました。
他者との対話を用い、今を変化させたり、捉え直すことは全て政治と考えることができると改めて思い至りました。

また、生活の中の問題点を探して→から始まる5のステップで考えたことは、教室の中でも実践しやすい(もちろん非母語話者でも)と思いました。
様々な考え方のベースになる種をありがとうございました。

今日もっともハッとしたのが「結局のところ何についてのどういう問題だと言えるのか。抽象化して捉え直してみる」という言葉です。
BORの議論・会話を通して、今学期の授業の中でも「あの場面でこうできたな」などと、具体的にイメージできました。来年度のシラバス期限が2月初旬なので担当の教科にそれぞれ盛り込むつもりです。学生も面白がってくれそうなことを考えてみたいです。
実践はいいですね。よく理解できます。学生の立場も体験できました。
名嶋先生、嶋田先生、みなさま、ありがとうございました。
楽しくあっという間の時間でした。

大変有意義な時間を過ごさせていただきました。異文化の国から来た外国人と対峙している者にとって「人とは違うこと」を認めなければ当然やって行けない領域です。ですが、日本に住む、日本人の中で生きていくことを補助しなければならないのですから、寛容の境地でいられない事例が多いのも事実です。移民の多いドイツは「移民」との共存は無理であったとメルケル首相の演説にもありました。同様にフランス首相、アメリカ大統領も公言しています。日本は外国人の受け入れなしでは立ち行かない状況にあってその「無理」に「折り合い」を如何につけるかが問われています。民主的なシチズンシップとは私たちのような外国人に向き合う最前線の者たちにとって、大変重要で意義深い意識であると考えます。先生の講義の第3弾も期待致します。

どんな身近なことにも、どんな生活上の些細なことのなかにも、「政治」はある。フーコー的な意味でもそうだし（東浩紀が「それが意味することの本当の恐ろしさを誰も分かってない」と言っていたのを思い出します）、「個人的な事は政治的である」という第2派フェミニズムのテーゼにも強く共感してきたので、そう考えてきましたが、その視点を自分自身の実践にどう落とし込むか、という事を考え始めています。キーワードは「作法」です。
どちらかというと、私は、今までは「論争に勝つこと」、論破することを重視してきました。学生時代、社会運動に身を挺する中で培ってきたものです。原点として、そこは捨てないと思います。「言論で勝つ」事は必要なことだと考えています。ボイテルスバッハの「圧倒の禁止」は、「政治教育」における政策文脈であり、つまり「教師」が「言論」以外の「立場の権力性」を行使してはならない、という原則なのだと考えています。「強く主張すること」を禁じているものとは解釈していません。ただ、名嶋さんが、ブレークアウトの前に言われていた、どんな場にも「積極的にたくさん発言する人」の存在によって、何となく、「場の力関係」が生じてしまう事を警戒する感性はとても大事なこととも考えています。
もちろん、社会生活を経て、「世慣れて」むき出しにそんな事をしてきたわけではありません。ただ、どちらかというと、それを「波風を立てないために、やむを得ないこと」として考えてきたようなところがあります。そうではなく、いろいろ制約はあるけれども、自らを原点として、どう関係性を育み、ネットワークを形成していくか、とても小さいけれども「私」も社会を形成する、一つのノードなんだ、その「責任」があるんだ、そして、そこで必要なのは、「振る舞い方」＝「作法」なんだ、という考え方です。

具体的なその実践として、最後のオンライン授業での「顔出し」の話、異なる意見、立場の発話があって、とても大きな気づきがありました。私自身、考え方が変わったし、深まったし、もっと掘り下げて話せれば良いな、と感じました。

もう少し、話ができればよかったな、と思ったのは『10代からの批判的思考』を読んだのですが、ここには、日本語教育の現場でも、取り上げるべき、そして、私自身折に触れ、授業で取り上げてきたテーマがあると感じました。たとえば、日本語教育において「キャリア教育」をどう考えるか、掘り下げて考えたい点です。

物事をあらゆる角度から見つめることが大切だとはわかっていながら、自分と違う意見を受け入れることは意外と難しいと思いました。
ニュースのタイトルから「政治」かどうかを考え、またその理由も提示していくグループワークはとても面白かったです。日本人学生にも留学生にも、もちろん社会人の授業でも取り組んでみたいと思いました。
一方で、多様な意見が出るようにするというのもまた難しいですね。限られた時間の中でディスカッションができるようなファシリテーターとしての手腕も身につけなければならないと感じました。
あっという間の90分でした。ありがとうございました。

ワークショップで参加者同士で話し合いや対話ができて、あっという間に時間が過ぎました。グループワークはとても楽しかったです。第6回、第7回と2回　参加させていただいて、ボイテルスバッハコンセンサスや「日常生活自体が政治」ということ、対話のおもしろさや重要性がわかりました。自分の実践にもぜひ取り入れていきたいと思います。
講師の名嶋先生、コーディネートしてくださった嶋田先生、ご一緒させていただいた皆様、本当にどうもありがとうございました。

ブレイクアウトセッションで、テーマについて対話をしていくことで、理解が深まりました。以前参加させていただいたときには、概念を理解し、今回は実践する際のヒントが得られた気がします。今まで漠然と抱いていた「政治」の意味が、とても狭義であったことにも気がつきました。身近にある出来事を考える際に、抽象化して考え、視野を広げていくことを今後も意識していきたいと思います。
自分の価値観や、きっとそうであるべきだと理由もなく思っていることをもう一度見直し、自分の周りにいる人と対話しながら、新しいものを作っていきたいと思います。参加された方々から出たオンライン授業での実践方法もとても参考になりました。
目の前の問題から目をそらさずに、しっかりと向き合っていこうと思います。貴重な機会をいただきまして、本当にありがとうございました。

学生にディスカッションをさせていると、「先生、考え方が違うから」みたいなことで、終わらせようとすることがあります。違うなら、その中に共通点はあるのか、どのように解決ができるのか、ということまで考えさせてみよう、今回はそんなことを思ったワークショップでした。ワークの「これって政治？」では、「これ、家庭の問題」と直感的に思っても他の人の意見を聞いていると、そういう考え方もあるのか、じゃ、政治かと気づくこともたくさんあり、他の人との対話がいかに自分に気づきを与えてくれるのかを改めて思いました。名嶋先生も触れていらっしゃいましたが、レベル分けはかなり難しいと思いました。一つのトピックが多岐に渡る問題を包括しているからです。私が担当している一つのクラスは学生全員が欧米系というものすごく議論好きの学生が集まったクラスなので、このワークは授業で取り入れたら、面白いだろうなと思いましたが、新聞の見出しから考えさせる（今、ちょうどこの単元を勉強中）というのはかなりハードルが高そうで、どのようにアレンジしたらいいか考え中です。今回の寺小屋は自分自身を振り返る物でもありましたが、授業のヒントもたくさんいただいたワークショップでした。名嶋先生、嶋田先生、どうもありがとうございました。

はじめは政治的、論争とか堅い表現が多く受け止めにくかったですが、皆さんと話し合いを繰り返すうちに少しづつ理解、うけとめられるようになりましした。
ボイテルスバッハ　コンセンサスの３つはとても興味深かったです。1）圧倒の禁止　　２）　３）学ぶ人の必要なことを学ぶ　自分事として自分に引き付けて考える。どれも納得の内容です。日々心掛けていきたいと思いました。
対話の大切さをより認識しました。そして話し合いでお互いの気持ちや考えを知ることで問題も解決できることがあると思いました。
授業内で様々な過程で、教師側の一方的な考えを押し付けるのではなく、学生との様々なやりとりをしていき、お互いの理解を深めることが大切だと思いました。
教師の考え方視点、余裕をもってことに当たることができればいいと思いました。　自分を振り返る機会を与えていただき、ありがとうございました。

ワークショップを通し、身近なこともすべてが民主教育に繋がるのだと、思っていた以上に自分自身が枠にとらわれていたのだと気づかされました。
ワークショップを企画してくださった嶋田先生、講師の名嶋先生、参加されたみなさん、ありがとうございました。

今回も有意義な時間をありがとうございました。「喪文化の若者」であることを自認し受け身の中国人学生に、どう授業を展開していけばよいか悩んでいましたが、プレイクアウトセッションで行った「最近嫌な気持ちになったこと」を考えることは、ごく個人的な問題から解決策、抽象化まで自分で行い、共有でき、すぐにでも授業に取り入れさせて頂きたいです。「新聞記事」の読解→ディスカッションもよくやりますが、あまり盛り上がらず、こういう方法があるんだと大変参考になりました。また、ディスカッション時の教師の立ち位置も迷っていましたが、名嶋先生のスタンスを拝見し、圧倒ではなくご自身のお考えを述べながらも寄り添う姿勢に納得いたしました。頂いたたくさんのヒントを、これからの授業に活かしていきたいです。ありがとうございました。

今回初めて参加させていただきました。読解の授業の中で、ちょっとした工夫により、実生活で必要な知識や思考力を育てるきっかけになるということを教えていただきました。また、私自身、意見が異なることへの恐れがまだあります。それはチャンスと捉え、恐怖心を克服していきたいと思わされました。短い時間でしたが、学びが多かったです。本当にありがとうございました。

「政治」というと、国会とか首脳会談とかくらいしか頭に浮かばない"政治"音痴なわたしにとって、「民主的シチズンシップ教育」というのは、思想コントロールとか思想教育とかにつながらないかな、というのが、第6回の資料を読んだときの印象でした。「愛国心教育」みたいなものが頭に浮かんでしまいました。
それで、自己紹介などのファイルにはあのようなわけのわからないことを書いてしまったのですが（なので、あのファイルのわたしの欄は黒く塗りつぶしていただけると幸いです）、それは大きな勘違いだったことに気がつきました。
第7回に参加して気がついたことは、「政治」は実は身近な自分の周りから始まっていたのだな、ということです。そして、その理想的な基本原則というのは、互いを否定したり批判したり、相手をおさえつけたりするのではなく、互いを尊重し、わかり合おうとしながら折り合いをつける、当事者全員にとって心地よい中間点を見つけることなのかな、と感じました。原始的・・・と言っていいのかわかりませんが、太古の昔に人と人とが関わり出した頃に既に「政治」というものは始まっていて、その当時は実はそんなシンプルなところから「政治」が始まっていたのかもしれないなと思いを馳せました。
一瞬一瞬がとても有意義でしたが、最後に全体で語り合えたのはとても貴重な時間となりました。
学びの機会を与えてくださった名嶋先生、嶋田先生、そしてみなさま、本当にありがとうございました。
教育や生活の場に少しずつでも実践していきたいと思います。
また機会がありましたら、ぜひ語り合いたいです。

とても大きなテーマで、今回どのような切り口で入って行けるのか、楽しみにしていました。まず、授業の中で取り組んでいけることは、一人一人の学習者を本当の意味で受け入れていくことであると感じました。また、物事を見る際、どれだけ自分にその深意を読む取る力があるのかを認識し、意識し、そして成長していくことの大切さを痛感しました。色々な角度から物事を見る機会を与えていただいたワークショップでした。ありがとうございました。

嶋田先生、いつも学びの機会を惜しみなく与えてくださり、感謝しております。
まず、「対話」ができるということは幸せなことだと感じました。「なぜ違うのか」ではなく「違って当たり前」の視点を持って対話を始めるだけでも落ち着いて話せると思いました。嶋田先生の寺小屋という安心できる空間でつながった方々と対話をする中で素朴な疑問の答えが生まれたり、解決策のアイディアが出てきたりしました。こういうことが、家族やクラス、地域などでできれば、いろいろなことが前向きに解決へと向かうこともあるだろうと思いました。授業にも人との対話にも心がけ、この幸福感を広げていきたいと思います。今回もありがとうございました。

「個人的」にはどうにもならないことはすべて「政治的」と言って良いのではと考えました。ただ、もちろん「政治的」であることは「政党的」であることとは全く異なるのですが、街場の日本語学校に持ち込むのには「勇気」と「知恵」と「味方」が必要かなと、少し弱気になってしまいました。「政治的」を「社会的」と呼びかえてしまうとやはり本筋からずれてしまうのでしょうか？そこらへんを話し合いしたかったですが、時間切れ（というか私が、あとに「授業」があったためソワソワして申し訳ありませんでした）。名嶋先生、ほんとうにありがとうございました。Facebookでの語り口とはまったくことなる、おやさしい語り口にも魅了されました。

学生と民主的に対話を重ねていくことが大事だということを再確認しました。みなさん、オンライン授業に関わる問題点を多く抱えていらっしゃるのですね。日本語学校や大学など、フィールドによって状況も違うことがあるかもしれませんが、特に大学などの高等教育機関であれば、この問題をいいチャンスと捉え、学生と対話を重ねて自分ごととした問題として取り上げてみると、学びの機会にもなり、納得して授業参加ができるのではないかと考えました。教師も、教える授業から共に考える授業、共に作る授業をする、オンラインで同期しているのであれば、同期している授業だからこそできる授業展開があるのではないかと感じました。オンラインで、対話を重ねる授業は、関係性も重要ではないかと思います。オンラインの授業時間だけでは、非常に難しいこともあるかもしれませんが、名嶋先生のご意見を参考に、今後も取り組んでいきたいと思います。

　前回、名嶋先生のお話を伺って、異なる考えにしっかり向き合って対話を重ねることの大切さを改めて感じ、日本語教育に関わるものとしては、対話を進める中で威圧的な言葉を使わず、お互いにいい結論に向かっていくためによりよい表現を探せるようになりたいと思っていました。今回はその考えをBORなどの話し合いの時間に実践したいという思いでした。
　ところが、話し合いのテーマをいただいたら、そのテーマについて自分が十分に話せるだけの知識がなかったり、ある問題(例えば、オンラインでの授業の問題点など)を考えるときに、その原因がどこにあるのかクリアに整理できなかったりしていることに気が付きました。
　お互いにいい結論に向かって十分に対話を進めるためには、もちろんその場でわからないことや、解決したい問題の焦点や原因を確認しあうことも大切ですが、議論を前に進めるためには、対話の当時者が広い視野や知識を備えていて、問題点を正確に明確化して、ゴールに向かう力が必要であることを実感しました。
　お話を伺う経験と、お互いに話す経験を通してでないと今回のような気づきはなかったと思います。貴重な経験をさせていただいたことに感謝いたします。

2回続けて参加させていただきました。深いテーマを掘り下げていく学びには単発ではなくシリーズでレクチャーを展開することが効果的だと思います。1回目のパワーポイントを使ってのプレゼンテーションでは、キーワードとなる’critical thinking'や’市民教育’、’政治’などが抽象的、総括的に語られ、全体的な概念を受けとる形でしたが、2回目の参加型ワークショップでは、それらのキーワードを具現化する活動でした。抽象から具体へという流れが面白く、例えば、反対に具体から抽象へと持っていくレクチャー形式も授業構築のバリエーションとなる、と、今後の自分自身の指導の参考になりました。新聞の見出しを使い、受講者の身近なものにシフトして’政治’のありかたを考えさせるのは面白いです。さらにそこから調べ学習や受講生各自の研究、発表へとつながっていくことで、critical thinkingの実現に近づきます。ワークショップの後、この感想をどのように書こうかといろいろと考えさせられ、キーワードや主旨などを心の中で反芻しました。その考えさせられたことが大きな学びとなりました。ありがとうございました。
2回目の参加で更に理論が深まりました。それは、特に皆さんとのブレイクアウトルームでのワークが学びになりました。いろんな考えを傾聴することで自分との違いや同意していることなども、何処がどんな風に…と、漏らさず聞こうという気持ちが芽生えてきました。ありがとうございました。
第６回で伺った内容を忘れかけていたので、復習することができました。また、参加者のみなさまとの対話のなかで、自身の思考と他者の思考をメタ的に観察することができておもしろかったです。
「政治的」とはどのようなことなのか、グループワークで考えることができました。 私たちの生活の中での物事の捉え方、他者との関係性の構築そのものなどだと。 自分のこととして、社会や政治を捉える、新しい「政治」の見方を、クリティカルシンキングともに、学ぶ場があることを願っています。 その体験をする機会をありがとうございました。 また、私は「情報教育」でメディアリテラシーなどを扱っていますが、言語教育やその他の分野や領域とも連携しながら、考え、ともに取り組んでいければとも気づきがありました。 今回、続編を企画、実施いただき、ありがとうございます。多くの気づきがあり、今後も継続して考え、取り組んでいく機会となりました。
名嶋先生の言われている「市民的シチズンシップ」をどのように取り入れるか、「対話を積み上げる」を考えると、「対話を重ねることにより相手との違い、違いを認め合うこと、自分のこととして自分に引きつけて考える」を言語教育の場においてどのように実践していくかである。 　授業実践において教師の一方的な授業ではなく学生の持つ力を、学生がいかに自分らしく学んで行けるかを考えなければならないだろう。 　しかし、言語教育の場においては、「対話」の基本的なツールとしての「言語」が大きく立ちはだかってくるので、「対話」をどのように成り立たせるかが大きな問題となると思われる。 その為に対峙している学生とだけではなく、日頃から「市民的シチズンシップ」について考え、多くの人との「対話」を通して自分の中に養っていく必要があるであろう。 「対話」は単に言葉だけではなく、「ノンバーバルコミュニケーション」も「対話」の大切な一つでであろう。